

平成 18 年度 修士課程学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること）

退院前訪問指導のプロセスと作業療法士の核となる役割に関する研究
— 9 名の作業療法士に対する調査の分析 —

学位の種類： 修士（ 作業療法学）

保健科学研究科 作業療法学専攻 学修番号 05855606

氏 名：光田 美智

（指導教員名： 菊池 恵美子 ）

注：1,000 字程度（欧文の場合 300 ワード程度）で、本様式 1 枚（A 4 版）に収めること

退院前訪問指導の目的は「退院に先立って患家を訪問し、患者の病状、患者の家屋構造、介護力等を考慮しながら、退院後の療養上必要と考えられる指導」とあるが、作業療法士（以下 OT）がどのような視点で関わっているのかについての報告は少ない。

本研究の目的は脳血管疾患患者を 1 例として、OT による退院前訪問指導のプロセスを明らかにし、保健医療専門職としての OT の核となる役割を探索することである。

そこで、今回は脳血管疾患患者の退院前訪問指導の経験のある臨床経験 3 年以上の OT 9 名を対象に半構造化質問形式の面接を実施し、修正版グラウンデッド・セオリーアプローチにより分析を加えた。調査は平成 17 年 9 月～平成 18 年 11 月にかけて行った。1 回の面接に要した時間は 35 分～81 分平均 49 分であった。

分析の結果、まず 92 の概念を生成し、さらにそこから 16 の一次カテゴリーを生成した。次いで、16 の一次カテゴリーから 3 つの 2 次カテゴリー「回復ニーズへの対応」「院内作業療法」「在宅支援」を生成した。

「回復ニーズへの対応」は「院内作業療法」へとつながり「自信づくり」へと変化するプロセスであった。

「院内作業療法」は患者の回復への期待を感じながら、「明らかになる全体像」を把握していく過程と考えられた。それは「治療選択」によって患者や家族の不安に対する揺れを取り持ち、自己決定を促す「自信づくり」のプロセスでもあった。

「在宅支援」は入院当初から「在宅生活の見極め」と「器に帰る準備」をによる計画的な在宅援助を実施していた。「退院前訪問指導」は患者・家族の生活支援の役割を担っており、地域へつなげる場でもあった。これを契機に「目標を共有」し、「集中すべき課題の具体化」が明らかとなり「自信づくり」へと変化をし、「退院」から「自分たちで問題解決をしながらの在宅生活」へとつながっていった。

一方抑うつ状態が持続のまま在宅に移行となった事例が示され必ずしも脳血管疾患入院患者の全てが「自信づくり」に至らない可能性も示唆された。

本研究の結果、OT による退院前訪問指導のプロセスは「回復ニーズへの対応」「院内作業療法」「在宅支援」の 3 つのプロセスにより構成され、これらのプロセスは脳血管疾患患者の「自信づくり」にむけて影響を与えながら展開していくプロセスと解釈された。「自信づくり」は OT の核となる概念となり、在宅生活への移行に関わる OT には「自信づくり」を促していく役割が重要であることが示唆された。